

芦屋大学論叢 第78号  
(令和5年3月8日)抜刷

《研究ノート》

「社会に開かれた教育課程」の可能性

―戦後「学校農業クラブ」の実践に学ぶ―

山 片 崇 嗣



## 《研究ノート》

### 「社会に開かれた教育課程」の可能性

#### ―戦後の「学校農業クラブ」の実践に学ぶ―

山片 崇 嗣

芦屋大学経営教育学部

#### 1. はじめに

文部科学省は近年、社会的な実践と教育活動をつなげていくという方向性を提起している。(中央教育審議会答申, 2016)<sup>1)</sup> すなわち, 中等教育, 特に高等学校における地域教育実践を重視し, 今後さらにその実践を加速しようとしている。いいかえると, それは「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し, 生徒が社会と連携, 協働しながら未来の創り手となるための資質や能力を育もうとするものである。したがって「社会に開かれた教育課程」は生徒の学びを主体的, 対話的で深い学びを具現化することを目指し, 地域の自治体, 教育機関, 産業, 家庭教育などと複合的かつ相互的に作用させ, より質的に高い教育効果をあげることを目標とした試みであるといえよう。

ところで, 教育実践における「主体的, 対話的で深い学び」を具現化しようとする, その試みは, これまでの日本の教育には見られなかったような新たな, 斬新でかつ効果的なものであると感じられるかもしれない。というのは, 1960年代初頭にはすでに学歴社会という状況が誕生したことで, 大学は偏差値という新たな価値観を強く意識するようになったからである。やがてその価値観は高等学校にヒエラルヒーをつくり, 学校の存続のための重要な要素にもなってきた経緯がある。その変容にともない, 中等教育, 特に高等学校を中心に, その教育は大学に入学するための準備的な教育機関であるという考え方が広がっていった。その流れに追随するように, 特に普通科高等学校は偏差値の高い大学に進学するための教育機関としてこそ意味を持つという社会的な認識と, そうした一般的ニーズが高まっていった。したがって, そのニーズに呼応するかのように, 現在では高等学校に対する社会的評価は偏差値を強く意識をするものになっているといっても過言ではない。

一方, グローバル社会が到来した今, 社会的にも国家繁栄という観点からも世界的な流れとの関係を抜きに日本の将来は考えられない。しかしながら, 現代社会において, その将来を担う若者が自ら主体的, 協働的に学び, 多様性を育みながら成長していくための実践の場は, まだまだ乏しいのが現実である。そうしたなかで, 若者の社会的成長・発達, ひいては日本の将来を危惧する声は年々高くなっており, 知識技能の習得だけを目指す, いわゆる偏差値教育の弊害が顕著になってきているといわざるをえない。これまでの教育は万能ではなく, 一定の知識の蓄積には効果的ではあるが, 独創的, 創造的に思考や行動を発展させていくには欠点があると多くの人が考えている。

そうしたなかで偏差値教育から脱却し, 世界で活躍できる人材の育成のための教育実践の確立が急務となっているといえる。一方, 教育現場では, その変革にともなう教育手法や教員の経験や技量が追いつかず, 戸惑いを隠しえないのが現状である。また, その教育モデルの確立を模索するなかで, 海外の教育実践に学ぶ考え方, 試みもある。

しかしながら、その教育モデルは、実はこれまでの日本の教育に存在しなかったわけではない。戦後、間もなく日本の教育は新しい教育課程観のもと、生徒が自ら考え、地域と連携しながら協働的に学び、社会に貢献していく、という教育目標のもと、社会に開かれたさまざまな地域教育実践がなされていたことを忘れてはならないであろう。そのなかで、筆者が最も注目する事例が戦後すぐにアメリカから導入された学校農業クラブの実践であると考えられる。

本研究では文部科学省がかかげる、「社会に開かれた教育課程」という教育実践目標を考察したうえで、戦後、アメリカの農業教育実践を基に日本に導入された学校農業クラブの活動について、その趣旨と内容を検証する。本研究はまだその端緒ではあるが、学校農業クラブの取り組みの考察を深めていくことで、今日目指されている「社会に開かれた教育課程」の意義や在り方、その方向性を見出すための重要な基礎研究となると考える。

## 2. 「社会に開かれた教育課程」の実現

文部科学省は2020年からの新学習指導要領で、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という理念を学校と社会が共有し社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むために、今後「社会に開かれた教育課程」の実現を重視すると明言している。

また、同時に文部科学省はこの理念の実現に向けては、組織的・継続的に地域と学校が連携・協働していくことが大変重要あり、「より良い学校教育を通じてより良い社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められている資質・能力を子供たちに育むことを重視している。これが「社会に開かれた教育課程」という方向性を打ち出すこととなった。そしてその実現に向けて、地域と学校の連携・協働の推進が重要であると提言している。すなわちそれは、学校、社会、地域が同じ方向性のもと、連携して教育を提供する必要があるということである。

加えて、文部科学省は「社会に開かれた教育課程」の実現のためには、これからの教育課程には、社会の変化に目を向け、教育が普遍的に目指す根幹を堅持しつつ、社会の変化を柔軟に受け止めていく「社会に開かれた教育課程」としての役割が期待されていると指摘している。そしてこれまでは学校や家庭教育が教育実践の主なフィールドとされてきたなかで、「社会」や「地域」も教育の担い手として重要で、学校とともに地域社会が教育に密接にかかわる必要があると論じている。

次に、このような「社会に開かれた教育課程」を実現するために、重要な要素となるものとして、主に以下の3点を挙げている。

- (1) 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- (2) これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- (3) 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。(中央教育審議会答、2016)<sup>1)</sup>

特に(3)では、教育の場は学校に限らず、地域の資源を活用する、という観点から、これまでの中等教育の場で、実践目標として優先されがちであった、受験指導という概念から脱却していくことを暗に示して

いるもの、ととらえることもできるのではないだろうか。次の図1（中央教育審議会答申「別添資料」、2016）<sup>2)</sup>は「学習指導要領改訂の方向性」と地域と学校の連携・協働、すなわち「社会に開かれた教育課程」の実現の概要である。

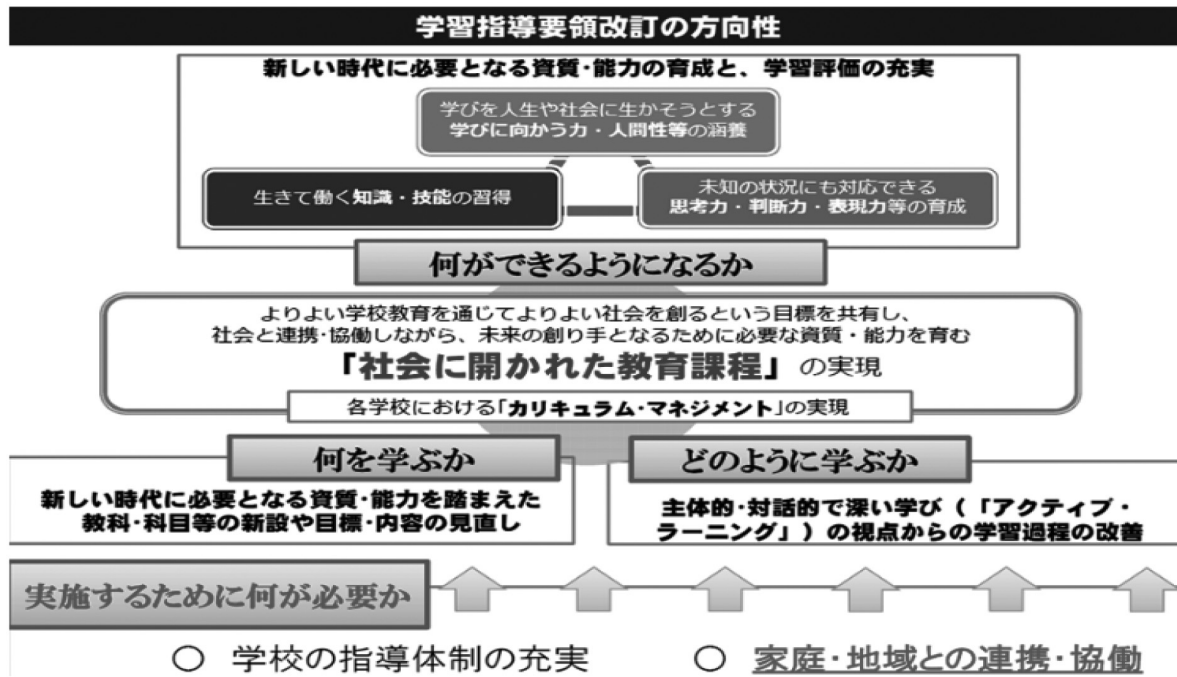


図1 学習指導要領改訂の方向性（イメージ）

### 3. 学校農業クラブの誕生

戦後日本の高等学校において、社会、(地域)に根差した教育実践は様々な形で取り組まれたが、その典型的なものが、戦後直後の高等学校農業科で取り組まれた学校農業クラブの実践ではないかと考える。学校農業クラブは、1948年、アメリカで発足した農業クラブ(FFA: Future Farmers of America「未来のアメリカの農業経営者」1928年発足)の概念を踏襲する形で、戦後日本の高等学校で「学校農業クラブ」として導入された。戦後の学制改革により成立した新制高等学校は、当初、生徒の自主的、自発的活動を促進することが重視された。端的に言えば、学校農業クラブはそのための組織として作られたのである。その教育実践は今まさに文部科学省が実践しようとしている「社会に開かれた教育課程」の実現、すなわち生徒たちが主体となって自ら考え、また地域と学校が協働的に教育を担っていくという教育実践と同じ性質のものであった。地域の農業の発展と人材育成の取り組みから、地域社会の発展と生徒の成長・発達を統一して追求し、結果として社会に貢献するという実践目標を、学校と地域が共有することが目指されたのである。

学校農業クラブは、1948年(昭和23年)に戦後の新制高等学校の学習活動の中で、農業高校生自主的・自発的組織「SAC」(School Agriculture Club)として誕生した。1950年(昭和25年)には全ての都道府県に学校農業クラブが誕生し、全国組織として日本学校農業クラブ連盟が結成されるまでに発展した。また、

その後「SAC」の考え方をを持った組織体は、各都道府県の農業高校に大きな影響を与え、やがて全国のご共同連合体組織が発足され、日本学校農業クラブ連盟「FFJ」(Future Farmers of Japan)として発展するに至った。また、さらに農業を学ぶ高校生の農業クラブ員としての活動の成果を発表する場として、日本学校農業クラブ連盟全国大会が開催されている。(日本学校農業クラブ連盟)<sup>3)</sup>

現在、日本学校農業クラブ連盟は、全国の農業高校生で構成され、約75,000人のクラブ員により組織されている。各農業関係高校の学校農業クラブは、単位クラブと呼ばれ、地域の特徴を生かした活動を行っており、各校の単位クラブにより各都道府県の学校農業クラブ連盟が構成され、各種発表会・競技会等の校内大会をはじめ、県連盟大会などの競技会等が行われ、地域ブロック連盟大会、全国大会へとつながり、毎年全国大会が開催されている。さらに、アメリカのFFA(National FFA Organization)をはじめ、大韓民国FFK(韓国営農学生連合会)、タイ王国FFT(Future Farmers of Thailand)などの友好団体と交流を行なうなど、国際的にも開かれた高校生の学びの組織となっている。以上のことからわかるように、当時の農業クラブの実践は、まさに社会に開かれた教育ということができよう。

#### 4. 学校農業クラブの趣旨

以下に、学校農業クラブが発足した当時のその趣旨、目標を考察しておきたい。1950年に、当時の文部省初等中等教育局から発刊された『学校農業クラブの手引き』(文部省初等中等教育局, 1950)<sup>4)</sup>には以下の記述がある。

##### 1. 学校農業クラブの性格

元来人間は群居をなして生活する本能をもち、且つ目的を同じくする傾向がある。特に青年時代には心から話しあう相手を欲し、また関心を悲しくする者が集温をつくりやすいときであるから、これらを善導してクラブをつくらせ、行わせることは大切なことである。

農業高等学校あるいは総合高等学校における農業に関する過程に入学してくる生徒は、その大部分が将来農業自営者か初級農業技術者になろうとする希望をもつ者である。したがって彼らは農業に関心をもち、学校において教師から指導をうけ、学友と切さたくましてよい農業者よい農業技術者になろうとする。ゆえに教師が生徒の人間形成に強い影響を供え、また、生徒が相互に影響しあって人格をみがきあうことは学校教育上重要なことである。

学校農業クラブは、総合農業学級の生徒あるいは農業高等学校の全生徒、または総合高等学校における農業に関する課程の全生徒が会員となることができ、一つの学校には必ず一つの学校農業クラブを組織することが望ましい。その活動の一部分は正規の授業時間を使用して、農業技術の進歩や農村生活の向上のために寄興しようというのである。

したがって農業に関する教科を担当する教師は、学校農業クラブの顧問となって、クラブ活動を指導し援助することが望ましい。概してクラブ活動は直接生徒の自発活動に基づくものではあるが、教師は陰の人としてこれに助言を興え、正しいあり方に導くことが必要である。

##### 2. 学校農業クラブの信条

学校農業クラブでは、その目指すところを簡単な言葉で表現し、それを語にしている場合がある。これらは学校農業クラブに参加した生徒が、クラブの犠牲を理解し、その目的とするところを体得して、農業者と



してまた農村人としての信念をかためるに役立つものである。次にあげるものは、アメリカのF・F・A・で用いられているものである。

- 行うために学び (Learning to do)
- 学ぶために行い (Doing to learn)
- 生きるためにかせぎ (Barning to live)
- 世につくすために生きる (Living to serve)

### 3. 学校農業クラブ参加の必要

総合農業学級生徒あるいは農業高等学校または総合高等学校における農業に関する課程の生徒がなぜ学校農業クラブに参加することが望ましいか。次のように記されている。

- 1 生徒はそれによって、自己と、自己を表現し価値のある計画の指導者となることを学ぶ場である強固な学校組織とを、一致させることができる
  - 2 生徒はクラブへの参加によって、その業績によって定まる会員の等級によって進級の機会を興えられる
  - 3 生徒のグループ活動は、他のグループ員と共に器の会合や、県のグループ委員会に出張する機会を興える
  - 4 生徒に、社会的訓練を興える
  - 5 生徒に、公民としての責任をとることを学ばせる
  - 6 生徒に、自分を表現する能力を興える
- (以下省略)

この手引きの「1. 学校農業クラブの性格」の中に「生徒が相互に影響しあって人格をみがきあうことは学校教育上重要なことである(中略)クラブ活動は直接生徒の自発活動に基づくものではあるが、…」と記載されている。これは、生徒同士が実践や意見交換を通じて人格を磨きあう、ということであり、教育実践として、主体性、協働性、多様性、寛容性などの素地を育むことを特に意識しているといえる。

そして「2. 学校農業クラブの信条」において、その四つの信条からは、生徒に学ぶことの意義を考えさせ、学んだことで得た知識をもとに、社会の課題に奉仕する、という姿勢を読み取ることができる。このように、出入り口から出口まで、いわゆる学びの一連の流れを考える指標となるものを示していることに留意したい。このことで生徒は何のために何を学ぶのか、という明確な達成目標に沿った学びを実践し、達成度を常に確認しながら修得できるものとなっている。

また「3. 学校農業クラブ参加の必要」の中に「自己と、自己を表現し価値のある計画の指導者となることを学ぶ場である」の記述から、『学校農業クラブの手引き』は修得した成果や自己の考えを説得力を持って、かつ効果的に他者に伝える能力の育成を重視している。すなわち教育目標の中に合理的な表現力の育成を盛り込んでいるのである。

これらのことから、当時の「学校農業クラブ」の実践は、知識・技能の習得に偏した教育概念とは大きく異なるもので、むしろこれからの「社会に開かれた教育課程」の構想に非常に近いものであったといえよう。

## 5. 学校農業クラブの実践例

では、具体的に当時の農業クラブの教育実践目標はどのように考えられていたのでしょうか。1950年の発足当時、日本学校農業クラブ連盟（FFJ）は、「科学性」「社会性」「指導性」の育成を目標としていたといわれている。そのため、集団的な意見発表や研究発表、レクリエーションなどが取り組まれていた。現代でいう、ディベートやディスカッション、またプレゼンテーションや協同研究など、アクティブラーニングの教育手法そのものを実践していたことがうかがえる。以下、一例として三重県の事例をあげておく。

「農業クラブはアメリカで盛んであったFFA（Future Farmers of America）の組織を真似た学校農業クラブがあった。新制高校発足すぐに組織づくりが進められ、全都道府県に農業クラブが誕生した。そして、五〇年十一月二日に東京の日比谷公会堂において「科学性」「社会性」「指導性」の育成を目標に、農業クラブの全国組織として日本学校農業クラブ連盟（FFJ）が結成された。県下では、明野高校、四日市農芸高校、上野高校などが活発に活動した。上野高校では五一年の大阪での全国大会に参加、五三年一月には、明野高校で県連盟の第一回大会が開かれた。内容は意見発表、研究発表、レクリエーションなどであった。農業クラブは現在も活動しており、『技術競技会や研究発表会などを全県、全国の規模で実施し』、農業高校生にとって『自信を深めるのに効果的な教育活動となっている』といわれる。」（三重県史，2019）<sup>5)</sup>

「科学性」「社会性」「指導性」は、日本学校農業クラブ連盟において現在も基本的な活動指標として掲げられている。同連盟の活動概要<sup>3)</sup>では、この三大目標について以下のように説明している。

◆科学性・・・私たちに科学性があるということは、物事や課題のおおもとにある決まりやいろいろな関係を、筋道をたてて合理的に考え、判断し、行動する態度を身に付けているということです。

◆社会性・・・私たちに社会性があるということは、自分と他人で構成する組織などの社会の出来事に關心を持ち、他人の意見や行動を尊重しながら、自分の考えを表現することができ、社会の一員として協力して行動する態度を身に付けているということです。

◆指導性・・・私たちに指導性があるということは、民主的、合理的に判断する力を身に付け、より良い方向へ組織やグループおよび自分自身をみちびき、目的を達成しようと行動する態度を身に付けているということです。

この三大目標は、加盟各校でそれぞれにわかりやすく解説され、明確な実践目標となっている。たとえば、広島県立吉田高等学校のアグリビジネス科のホームページ<sup>6)</sup>では、次のような形で生徒の将来の課題と関わらせて説明されている。

### 1 科学性

「科学性」とは、私たちが将来、農業や各産業に従事するときに必要な知識と技術をしっかり身に付け、将来、直面するであろう諸問題を合理的に解決する力を身に付けることです。

### 2 社会性

「社会性」とは、広い視野をもった幅のある人格を養い、協力して物事を行う力を養ったり、FFJ活動や地域社会の有益な事業に参加して、広く公共に奉仕する精神を養うことです。

### 3 指導性

「指導性」とはFFJ活動に参加して、自分の意見を積極的に述べるとともに、他の人の意見に耳を傾け正しく理解して尊重し、FFJの考え方や行動を正しく推進する力を身に付けることです。



次に、初期の「学校農業クラブ」の活動の事例として、福井県の事例を見ておきたい。福井県立福井農林高等学校の実践（福井県立福井農林高等学校 百年史編集委員会，1994）<sup>7)</sup> のなかに昭和 50 年代の記録として次のような記載がある。

「戦後の教育改革，教育基本法の制定により，個性の尊重と，自主的精神に充ちた心身ともに健康な人材の育成を目指し，特に農業教育においては，愛と平和を表わした学校農業クラブが学習活動の中心となった。豊かな人間性，個性の伸長，自発的，積極的な学習。継続的，実践的な学習。互いに切磋琢磨する学習等により，指導性，社会性，科学性を養成しようとするものである。」

「個々の生徒の能力，理解力，創造力，実践力を養成するためには，プロジェクト学習法によって問題解決の能力を養い，教師は正にそのよき指導者でなければならない。その問題意識をもった学習集団が学校農業クラブである。」

「校内幹部講習会年次大会，プロジェクト発表会，級位検定，技術検定，各種技術競技更にホームプロジェクト，校外実習，先進地見学，農村調査等の校外での学習活動，また県連盟，北信越連盟，全国連盟の研修会，発表大会へと農業教育の活動の場は広まっていった。当時の本校は，県大会はすべて独占，北信越大会においても各種発表・演示に最優秀の成績を収めた。そして全国大会にはクラブ活動状況発表，プロジェクト発表，測量競技等に優秀賞を獲得した。」

「農業クラブはまた，校内では生徒会と一体の組織として運営され，生徒会に所属する運動クラブ，文化クラブも農業クラブ員として極めて活動が活発化し，野球部の準優勝をはじめ，県下六種目に優勝旗をもたらした。校内は活気にみなぎり，諸先生方は夜を徹して生徒の指導にあたり，本校教育の発展に全力を尽した。一方学校農場の基盤整備や校地整備等もすべて生徒自らの盛り上げる力によって積極的に進められた。」

この実践から読み取れることは，当時の福井県立福井農林高等学校の農業クラブでは「問題解決の能力」を養うことが何より重視されているのである。当時の問題解決学習やプロジェクトメソッドの影響を受けたものと思われるが，地域の農業や農村の改善・改革に積極的に参画していこうとする姿勢が明確である。問題発見能力・問題解決能力の育成といった，文部科学省がこれからの若者に求められる資質の要素のひとつを，もうすでに「学校農業クラブ」の実践のなかで定着させていたことがうかがえる。

またさまざまな大会や検定，競技，発表会への参加を通じて，生徒の思考力・判断力・表現力などの向上を目指している。そして，そうしたなかで生徒の学ぶ意欲に向かう力や生きる力を育むことが，意識的に追究されている。さらに，そうした教育活動をとおして，生徒たちは「学校農場の基盤整備や校地整備等」に，生徒が課題を見つけ，それを主体的・自律的に取り組んで行くまでになっている。

加えて，生徒たちは受け身的に学校や地域から指示を受け，教師の指導の枠内で課題に取り組んだだけではなく，発生する諸問題や課題に対して自ら考え，解決する姿勢を見せ，それを実践していたことがうかがえる。また所属する組織自体にも磨きをかけ，より良い集団へと進化させていく意識と実行力が育っていたことも理解される。こういった学びのスタンスは，まさに現代において求められているアクティブラーニングの姿にほかならない。

## 6. おわりに

以下、本稿においてこれまで簡単に考察・検証してきたことの仮説的なまとめをしておきたい。学校農業クラブを中心とする教育実践は、一般的には農業分野の特別な教育実践ととらえられがちであるが、実は教育学の立場から見ると極めて貴重な教育実践であったといえるのではないだろうか。学校農業クラブにおいて、生徒たち自身が地域の人たちと協働的に学び、課題探求意欲と問題解決に対する情熱を持ち、その教育活動が70年余進められてきた。それを可能とした要因、その活動の本質的意義を、農業教育という分野に特有のものと決めつけず、教育学的に広く綿密に分析してみる必要がある。

その実践や実績はまさに現在文科省が進めようとしている「社会に開かれた教育課程」そのものであるといえよう。もちろん当時の教育現場や教育行政には、「社会に開かれた教育課程」という発想やその学びのガイドラインのようなものは存在しなかった。しかし、内実はむしろその言葉以上の実践であったように思われる。今、教育現場において「社会に開かれた教育課程」を導入、実践、定着させるための手法が模索されている。こうしたなかで、戦後日本の学校農業クラブの実践を深く考察し、それに十分学ぶことが重要であると考えられる。

### 【参考・引用文献】

- 1) 中央教育審議会答申、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』, 第197号, 2016.
- 2) 図1, 中央教育審議会答申、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』, 別添資料, 第197号, 2016.
- 3) 日本学校農業クラブ連盟, 「農業クラブ連盟とは」, <http://www.natffj.org/about/>, (参照 2023-01-11).
- 4) 文部省初等中等教育局, 『学校農業クラブの手引き』, pp.23-25, 1950.
- 5) 三重県, 『三重県史 通史編 下』, 「家庭科・農業クラブ」, pp.503-505, 2019.
- 6) 広島県立吉田高等学校 アグリビジネス科「吉田高校農業クラブ」, <https://www.yoshida-h.hiroshima-c.ed.jp/ka/ffj/ffj.htm>, 参照 2023-01-11).
- 7) 福井県立福井農林高等学校 百年史編集委員会, 『百年史』, 「学校農業クラブと教育の刷新」, pp.308-310, 1994.